

「児童虐待防止ぎふ」運動

全ての子どもたちの笑顔を守りたい 医療機関は、 ママたちの強い味方です

岐阜県内では医療機関と市町村、子ども相談センターが連携をして、子どもを虐待から守る取り組みを行なっている。子どもの虐待の早期発見・対応マニュアルの作成や、研修医の育成、さらに医療機関と行政、相談機関との連携強化などを牽引してきた小児科医師、岐阜市民病院長の篠田先生に医療者としての児童虐待防止への思いを語ってもらった。



岐阜市民病院 小児科部長 兼 小児血液疾患センター長
初期臨床研修センター長 Child Protection Team委員長
篠田 邦大さん

小児がん専門医として岐阜市民病院に20年従事。"for every child's smile"の合言葉を掲げ、同病院の小児医療を率いる。児童虐待防止に取り組む特任チームChild Protection Teamの委員長も務める。休日は高校生にラグビーを指導している

お話を聞いたのは

医療機関ができる

子どもを守るための環境整備

岐阜市民病院の虐待防止への

取り組みについて教えてください

篠田(以下、篠) 平成12年に児童虐待防止法が整備され、医療機関としても虐待防止への対策と支援を強化しようと動き始めました。特に夜間救急窓口のある病院には虐待の疑いがあり緊急性の高い患者が訪れるケースが多々あります。当病院ではChild Protection Teamを設置して、小児科医のみならずさまざまな専門医師、看護師、技師や事務のメディカルスタッフなど20数名でチームを組んで、子どもを虐待から守る体制を作っています。たとえば、あらゆる症例について、「子どもが家庭でどのような状況で育っているのか」、「安全な環境をつくるためにどう家庭と繋がり、継続した支援をしていくと良いか」など会議を重ね

て検討し、場合によっては子ども相談センターと連携をして支援策について話し合います。医療現場は今、それぞれの専門家が分野の特技を生かした、チーム医療が当たり前のように行われていますが、今後は病院と行政、相談機関、児童養護施設など機関を超えたチーム体制を作っていくことが重要だと考えています。

他にも、虐待のサインを見逃さないために医師向けの診察マニュアルを作成したり、夜間救急を担当することが多い研修医に向けて虐待の早期発見のための研修を行なっています。小児科医だけでなく、一人でも多くの医師が子どもの虐待への知識をつけること、そして子どもを正しく診る目を養って虐待の早期発見ができる環境を作ることが私の役割です。

地域のかかりつけ医と病院、 どのように連携されていますか？

篠 岐阜県では、昨年4月から岐

阜県総合医療センターが児童虐待防止医療ネットワーク事業として中心的な役割を担っていますが、各地域に中核医療機関としての大きな病院があり、地域の診療所・クリニックなど皆さんの、かかりつけ医、から紹介が届くような体制になっています。大きな病院では救急の患者として初診でみることも多いのですが、かかりつけ医は子どもの普段の様子を知っています。兄弟など家族の様子や定期健診の受診状況、予防接種の経過、そうした周辺情報からも子どもの状態が判断できます。その意味では、地域のかかりつけ医の役割は非常に重要です。子育て世帯の皆さんにお伝えしたいのは、ぜひ乳児期から、かかりつけの小児科医を見つけて、普段からどんな些細な心配事でも相談してみることです。小児科医は、医師のなかでもどちらかといえば人柄は穏やかで、子どもが大好きな人間が多いです。そして小児科医は必ず、親の言葉には耳を傾けること、と教育され

て医師になっていきます。親と協力しながら子どもの病気を発症を治療・支援していくのが小児科医の役割ですから、子どもとその家族に寄り添うのは得意分野。かかりつけ医はママやパパの強い味方なのです。

「誰かがやるしか、
子どもを守れない」

先生にとって虐待防止の取り組みに
強い使命感があるんですね。

篠 使命感というよりも、誰かやらねば子どもたちを守れない、という責任感かもしれません。私も子どもが好きで小児科医をやっていますから、虐待される子どもと関わるのは本当はとても辛い目を背けたい仕事。たとえば、小児がんであれば、病氣自体はマイナスイオン出来事だけれど、そこからいつか改善していくという夢を追っていきけるんです。患者も家族も一緒に頑張ってマイナスからプラスの

気持ちになれる。でも虐待に関しては医師ができることで少ないんです。実際、病院で発見できる虐待の数は虐待事案全体の1割程度です。生死に関わることは救えるけれど、子どもの日常の環境を救うことはできない。むしろ子どもが暮らす地域や保育園、教育機関のほうで子どもを虐待から救う中心なのです。

最後に、子育て世帯への
メッセージをお願いします。

篠 私はいつも研修医への最初のメッセージとして「自分に子どもができたときに虐待の可能性があれと思うか？」と投げかけます。多くの研修医たちは「ない」と答えます。でも、「ゼロではない」と私は言

